座右の銘

継続は力なり

宮内　睦美　大学院医系科学研究科　歯学分野　口腔顎顔面病理病態学　教授

実家には「継続は力なり」と大きな力強い字で書かれた書が飾ってありました。教師である亡き父の“座右の銘”で、家訓のようなものです。子供の頃、その書を見ながら「志を持ちそれに向かって継続して努力をしなさい」と滾々と言われたものです。「継続は力なり」はいつしか私の座右の銘となりました。

ところで、「継続は力なり」は、誰の言葉でしょうか？よく使われる言葉ですが、千里の道も一歩から、雨だれ石を穿つと同義語（？）程度のことしか知らなかったので、調べたことがあります。諸説あるようですが、「住岡 夜晃（すみおか やこう）」氏の「讃嘆の詩」の一部とする説が有力なようです。

「青年よ強くなれ / 牛のごとく、象のごとく、強くなれ / 真に強いとは、一道を生きぬくことである / 性格の弱さ悲しむなかれ / 性格の強さ必ずしも誇るに足らず / 念願は人格を決定す　『継続は力なり』/ 真の強さは正しい念願を貫くにある / 怒って腕力をふるうがごときは弱者の至れるものである / 悪友の誘惑によって堕落するがごときは弱者の標本である / 青年よ強くなれ　大きくなれ」というものです。この詩を読んだ時、亡き父の思いに触れた気がして、心が熱くなり、涙が溢れてきました。その時、「継続は力なり」は私の真の座右の銘となりました。定年まであと少し、私は「継続は力なり」を具現化できているのでしょうか？いつか父に会えた時、父は何と言ってくれるでしょうか？ちょっと楽しみです。

出る杭は打たれるが、出過ぎた杭には届かない

森川　則文　大学院医系科学研究科　薬学分野　臨床薬物治療学　教授

医療現場には、高度な技術を持った者達が協働して病気に侵された患者を救う職人集団がいます。そこでは、スタンドプレーは必要なく、お互いの技術を最大限に発揮させる協調力が求められます。すなわち、チーム医療が優先され、出る杭は危険と見なされます。しかし、誰にも解決できない問題は例外です。ここに研究テーマがあり、トライする意義があります。

20MBのメモリーしか持たないパソコンで、薬剤部システムを動かす。500台以上の入力端末から送られたデータを受け、処方箋印刷、薬袋印刷、一包包装機を同時に稼働する。さらに注射薬も払い出す。日本中のどの施設でもできなかったシステムを初めて稼働させ、現在の調剤システムを構築したことが、文部技官である私の研究人生の始まりでした。

βカロチン製剤、ブプレノルフィン坐薬等の院内製剤の作成、抗がん剤のリアルタイムTDM、生体組織（脳脊髄液、腹水、尿、前立腺組織、精巣組織、等）中の抗菌剤のTDM、モンテカルロ・シミュレーション搭載の治療支援ソフト開発、統合失調症薬のTDM、指先穿刺から得られた微量血液による薬物および生化学検査、大規模健康フェア（約2万人の測定）の開催、1,800回以上の医療関係者に対する全国での出張講義、医療現場では必要とされるのに簡単にはできないことだから興味を持ちました。自分の目標を達成することも大切だが、社会から求められても解決できていないことを地道にかつ確実に積み重ねるのも研究かも知れない。そういう研究のスタイルが、自分には向いていたのだと思います。